

リトアニア国立博物館で行ったアイヌの文化交流

平取町立二風谷アイヌ文化博物館館長 長田 佳宏

2026年2月5日～8月2日の約6か月間、リトアニアの首都ヴィリニウスに在るリトアニア国立博物館の分館・ハウス オブ ヒストリーズで、同博物館と平取町立二風谷アイヌ文化博物館が協働する国際展覧会「"Žmogus tarp pasaulių" A soul between worlds. Indigenous Ainu in Northern Japan and ethnographer Bronisław Piłsudski 世界の狭間にある魂：北日本の先住民族アイヌと民族学者ブロニスワフ・ピウスツキ」が開催されています。

1. ブロニスワフ・ピウスツキの功績の紹介

近年、リトアニア及びポーランド国内では、とりわけピウスツキが行った少数民族調査、社会活動等を再評価する機運が高まっています。氏が行ったアイヌ研究は、その多くが樺太アイヌに関する成果ですが、幾度か行われた北海道アイヌに関する調査も特筆に値します。1903年夏にはロシア帝室地理協会北海道アイヌ調査団の一員として渡道し、主に白老及び平取コタンでアイヌ調査を行ないました。平取では地域住民の肖像写真が30人分以上撮影され、さらに被写体の名前も記録されています。またヴァツワフ・シェロシェフスキによる紀行文も残されていて、調査の全体像や住民との交流の様子を知ることができます。

展覧会では、ピウスツキの生涯を親しみやすく伝えるための試みとして「パイカワ」という北海道アイヌの少女を創作し、ストーリーテラーの役割を与えています。



2. 平取町民によるアイヌ文化の普及・交流*

2026年2月27日～3月1日の3日間、リトアニア国立博物館に平取アイヌ文化保存会会員13名を派遣し、アイヌ文化の普及と交流（アイヌ文化ウィークエンド）を行ないました。この一連の活動には北海道大学の加藤博文教授、鶴澤加那子招聘教員にもご参画いただき長田と共にプログラムを実施しました。

保存会の活動としては、アイヌ文様の切り絵、アイヌ口承文芸、アイヌ古式舞踊、アイヌ文様の刺しゅう、保存会の活動紹介、アイヌ料理ワークショップが行われ、



加藤、鶴澤両氏と長田による講演、ドキュメンタリー映画

『Ainu | ひと』『フィシスの波文』の上映と合わせて11のプログラムが行われました。3日間のプログラムで参加者は約500人、期間中の展覧会来場者は約900人でした。

普及・交流事業の中で、参加者の意見や感想を聞いたところ、多くの参加者はアイヌ文化の予備知識はないが、異文化体験に興味があって参加したとのこと。リトアニアにキリスト教が伝来する中世以前は、自然への崇拝が生活に根付いていたこともあり、宗教的な観点からアイヌ文化に対する親近感をもったという参加者もいました。

3. さまざまな縁を大事にして

リトアニア国立博物館と保存会のこうした文化交流は、ピウスツキらによる北海道アイヌ調査がもたらした縁によります。平取町のような小さな町にリトアニア国立博物館が協力関係を依頼したのも、アイヌの伝統が色濃く残る地域性が評価されたからです。町の人口規模や経済力だけで平取町の価値ははかれません。そのことは1903年にピウスツキらが平取を調査地に選んだのと同じ理由と考えられます。



本展覧会は8月2日に閉幕し、つづいて本年9月～2027年3月にポーランドのスレユヴェク市に在るユゼフ・ピウスツキ博物館へ巡回します。今回お世話になった関係者との縁を大事にしながら、スレユヴェクでもアイヌ文化の普及事業を進めます。



(おさだ・よしひろ、会員)

写真(左中) 展示案内の北海道アイヌ少女パイカワ
(左下) 国際展オープニングで鶴澤氏と長田、講演で加藤氏
(右下) 保存会によるクリムセ(弓の舞)、アイヌ料理ワークショップ

* <https://www.facebook.com/photo/?fbid=787493631095132&set=pcb.787493697761792>